

16例につき、肝門型末梢型に分類、検討報告した。

5. 胃転移を来した原発性肝細胞癌の1例

箕山昭陽, 有田洋右, 常富重幸
仲野敏彦, 野口武英, 伊藤文憲
大野孝則
(社会保険船橋中央・内科)
大久保春男 (同・病理)

原発性肝細胞癌の消化管転移は稀である。その中でも極めて珍しい経門脈性胃転移を経験した。

患者は下腹部膨満感及び右側部痛を主訴として来院した67歳男性。入院時検査所見では軽度肝機能障害およびAFPの上昇をみとめた。腹部超音波, CT, 血管造影によって肝硬変非合併原発性肝細胞癌及び門脈内腫瘍塞栓を認めた。また、胃造影, 胃内視鏡ではボルマン分類不能な胃腫瘍像を呈した。剖検にて Edmondson II 型肝細胞癌, 非癌部の正常肝組織像及び胃粘膜への肝癌細胞の浸潤を認めた。

この様な肝硬変非合併原発性肝細胞癌と胃転移の合併は興味深いと思われる。

6. 脂肪変性を伴った肝細胞癌との鑑別困難であった迷入骨髓組織の1治験例

篠原靖志, 渡辺一男, 竜 崇正
本田一郎, 渡辺 敏, 坂本 薫
川上義弘, 竹内 修, 藤田昌宏
(千葉県がんセンター・消化器科)
菅三知雄 (同・病理)

症例は46歳男性。現病歴, 1988年1月6日上腹部痛, 下痢を訴え近医を受診。その際, 施行した超音波検査で肝下面の腫瘍を指摘され, 精査目的にて2月3日当センター入院となる。入院時検査成績には異常は認められなかった。US では肝右葉後区域に下面に接して $\phi 4$ cm の円形平滑な hyperechoic mass が認められた。CT では同部位は一部 high density を併った low density mass として描出され, enhance は不良であった。Angiography では Avascular な mass であった。脂肪変性を伴った肝癌を疑い2月16日手術の予定となったが, 前日トイレにて転倒し, 急激な血圧の下降とショック状態を呈した。その後, 全身状態が改善, 待期的に手術を施行した。腹腔内には約200cc の出血が認められ, 肝後区域の腫瘍の破裂と考え肝後区域切除を施行した。切除標本にて $4.5 \times 4.5 \times 3.0$ cm の腫瘍が確認され, 病理標本にて右副腎由来の骨髓脂肪腫と診断された。本邦におけ

る外科的に切除された副腎骨髓脂肪腫は27例であり, 多少の文献的考察を加えた。

7. 肝癌の腹腔内転移と鑑別困難であった amelanotic melanoma の1例

永田 徹, 中本 実, 吉田 忍
柳沢 暁, 高野 哲, 徳安 公之
関根千秋, 秋庭宏紀, 鳥海弥寿雄
金田利明, 津田直哉, 柏 崎 修
(慈恵医大・柏・外科)
猪股 出 (同・病理)

突然の腹痛と嘔吐を主訴に来院した76歳の男性である。入院時, 超音波検査で, 肝腫瘍と腹部巨大嚢胞状腫瘍が確認された。CT, 血管造影等で, 肝癌およびその腹腔内転移, または嚢胞状腺癌を疑われ, 術中凍結病理でも前者を強く疑わせた。しかし, 術後の詳細なる病理組織検査で, とくに, フォンタナ・マッソン染色や, S100染色でメラニン顆粒と思われる陽性所見が得られ, 腹腔内より発生した amelanotic melanoma およびその肝転移であることが判明した。

8. 多臓器不全及び MRSA 感染を合併せる外傷性脾炎の1救命例

椎名良直, 登 政和
(旭中央・外科)
浅田 学 (同・内科)

症例は47歳女性, ハンドルにて右側腹部打撲後7日目転院。転院時急性腎不全, 呼吸不全の状態, CT にて脾頭部に $7 \text{ cm} \times 6 \text{ cm}$ の仮性脾嚢胞を認めた。入院後強力な保存療法を行ない腎不全, 呼吸不全は小康状態となるも, 脾炎は軽快せず, 肝不全も出現したため開腹ドレナージ術を転院後8日目に行なった。開腹時血性復水を認めた。術中エコーにて脾頭部腹側の仮性嚢胞, 脾頭部背面の fluid collection を確認し, それぞれにドレーンを挿入した。術後, 脾炎, 腎不全, 呼吸不全, 肝不全はすみやかに軽快した。術後12病日よりドレーンよりMRSAの排菌を認めたが洗浄にて治癒した。

9. 門脈ガス血症を伴った急性気腫性脾炎の1例

宮城英慈, 加賀谷秋彦, 鈴木良一
平井康夫, 山下 道隆, 大島仁士
(松戸市立・内科)
浅沼勝美 (同・病理)

門脈ガス血症は欧米にて100例以上の報告例があるが,